

## Y19a 国際天文学・天体物理学オリンピック ポーランド国際大会の参加報告

中道晶香（京産大共通教育）、橋本修（群馬高専）、井上毅（明石市立天文科学館）、塚田健（平塚市博物館）、青沼恵人、伊藤寛子、岩崎野笑、岡本沙紀、小原亮太、孫翰岳、田中匠、泊あすみ、中村仁紀（東大）、安藤唯花（北海道教育大）、大平達也（京大）、桑江優希、塩田成陽（広島大）、佐藤耀介（立命館大）、清水美結（東京理科大）、牧田遥翔（埼玉大）

国際天文学・天体物理学オリンピック (IOAA) は、国際科学オリンピックの一つであり、国際天文学オリンピック (IAO) とは別の大会として2007年から開催されている。日本代表の派遣は行われていなかったが、このたび学生が中心となって立ち上げた日本天文学オリンピック委員会がチームリーダー2名と代表生徒5名を派遣した。

2023年2月の国内予選、3月の国内本選により高校生5名を選抜し、5月の宿泊研修、答案添削による通信研修を経て、2023年8月にポーランドのホジュフにて開催された国際大会 (IOAA 2023) へ参加した。世界52カ国から約250名の生徒と約100名のチームリーダーが参加した本大会では、多国籍チームで取組む団体戦もあり、活発な国際交流が行われた。個人戦は、5時間に及ぶ「理論ラウンド」、望遠鏡を操作して計算する「観測ラウンド」、ハッブル宇宙望遠鏡による観測データが使用された「データ解析ラウンド」、デジタルプラネタリウムにより再現された変光星や系外惑星の状況を観測する「プラネタリウム・ラウンド」の4種類が行われた。大会運営は、出題内容をチームリーダー全員で議論し、問題を加筆修正したり、試験後はモデレーションにて生徒の解き方を採点者と議論する民主的な運営であった。結果は、生徒1名が金メダル（世界3位）、1名が銅メダル、1名が優良賞を受賞した。

さらに、昨年参加したIAO2022大会と比較し、将来への展望と課題について議論する。